

〈指導記録〉「青い空コンサート」

アンサンブル演奏の指導についての報告

井 中 あ け み

はじめに

豊橋創造大学短期大学部幼児教育・保育科の「青い空コンサート」は、同科が総力を挙げ、地域の方々や子供たちを対象に開催するもので、学生にとっては、2年間の学生生活における最大のイベントと言っても過言ではない。そのプログラムの中の音楽部門に「器楽アンサンブル」が取り入れられており、実践を行っている。この記録は、昨年度の「青い空コンサート」における「器楽アンサンブル」の指導を行ったときの（約半年間7月頃より12月初旬）内容を記録報告するものである。

1. アンサンブル演奏指導の意義

「アンサンブル演奏」は個人の演奏レベルや経験のみで完成するものではない。それは、練習の繰り返しと共に、仲間とのコミュニケーションを深めることによって完成される作品である。このアンサンブル演奏を通しての学習は、音楽実技の向上をはじめ、人との協調性、作品全体を仕上げるバランス感覚など、音楽を通して様々な能力や関心を高める。またこの指導は、将来幼稚園教諭及び保育士として、演奏技術の差の大きい園児たちに、合奏等の指導をし

ていく際に必要不可欠な経験を積ませることとなり、将来の指導者としての資質向上につながるものと期待する。

2. グループ編成の方法

(1) アンサンブルに参加したい学生はオーディションを受けることとした。

（受験者10名，結果全員合格）

*ここでのオーディションの目的は、意欲を確認すると共に、「青い空コンサート」の一部を担当することに対する責任感などを高めることである。

(2) 楽器の特徴や友人関係などを考慮し、A・B・C3つのグループに分けた。

グループA…エレクトーン1名，ピアノ1名

グループB…アルトサクソ1名，クラリネット1名，オカリナ1名，ピアノ1名

グループC…エレクトーン1名，ベースギター1名，ピアノ1名，ドラム1名

3. 選曲，編曲

(1) 選曲（コンサートの対象年齢は5～6歳である。）

曲目は各グループで話し合い，全て学生

同士の話し合いにより決定した。

グループA…「ディズニィー」より、6
曲からなるメドレー

グループB…「千と千尋の神隠し」より、
「いつも何度でも」

グループC…「ジブリメドレー」より、5
曲からなるメドレー

(2) 編 曲

第一段階では、楽譜選びパート分け等全て学生自身で作成した。それをベースとし個人練習、アンサンブル練習を行う都度、教員のアドバイスと学生同士の意見の交換によって書き換え作り上げていくこととした。

(3) 指導上の留意点

学生たちの曲目選びは上記の通り時代に沿ったものであり、教員が選曲する場合と比べ、より一層聴く側の幼児に近い感覚で選曲されている。このフレッシュな感性を尊重し、教員の指導による曲目変更をしなかった。つまりここでは、通常学生たちの音楽の授業の大半をしめているクラシックの技法や、そこで積み重ねてきた表現法を十分に活用し、同時に学生の感性を失わず、聴衆にとってよりよいものとなるよう導いていくことが、教員に指導上求められる最も重要な部分と考える。

4. 授業時間割について

今回の場合「アンサンブル演奏」の企画の形が変わったことと、人選がオーディション方式であったことなどから、10人という小人数で編成した。そのため正規の授業として組むことが出来ず、全て課外（補講形式）で行うということとなった。授業数はコンサートまでに3グループで合

計約20コマ、早朝、昼休み、授業後をフルに活用し、学生も教員も許される時間のぎりぎりというところで練習を開始した。

5. 練習の経過

・第一段階（9月頃まで）

グループA…非常に仲の良いペアであったためか、大変良好な始まりであった。

〈指導のポイント〉

性格の大変に似通った2人であるため単調にならぬようピアノの音色などにアドバイスを行った。この場合いくつかのサンプルを教員が演奏し、本人たちが納得できる音色、表現法を選択させた。

グループB…楽器の種類が多いことと、お互いが打ち解けておらず他人事といった感じが見受けられた。

〈指導のポイント〉

楽器の種類が様々であるので、それぞれの楽器の特徴が皆に理解できるよう各自の演奏を鑑賞させた。早く「他人事的感覚」から脱出できるようそれぞれの楽器にできるだけ均等に主旋律があるように、編曲にも充分配慮した。

グループC…男子学生が入ったグループなので、曲作りにはダイナミックさが感じられたが、人間関係に多少の違和感があった。

〈指導のポイント〉

個性が強いグループであるので、協調性に対して配慮した。まず教員ができるだけそれぞれの学生とコミュニケーションを取り、各楽器の価値を強調し仲間同士で認め合えるよう方向付けることが大切であると考え、指導した。

・第2段階（11月頃まで）

グループA…おとなしい性格からか、表現力が乏しい。練習はまじめで、工夫もみられ編曲もほぼ完成した。

〈指導のポイント〉

自分たちが何を表現したいのかが、具体的に定まっておらず、楽譜通りに演奏することの価値観にとどまっていた。そこで次のようなイメージ学習を用いて演奏のスタイルを研究した。

*イメージ学習¹⁾

達成したい目的及び状態をイメージし、実現できる状態までの過程から最終目的までをイメージで学習する。

(例)

- ・悲しい感じのメロディー部分が思い通り演奏できている様子をイメージする。
- ・激しいリズムのフレーズを華やかに演奏している自分をイメージする。

—具体的指導—

自分の表現したい感情を具体的に思い浮かべ、イメージする。(ex. 悲しい→泣いている自分をイメージ)

楽器を用いて思い通りの演奏をする自分をイメージする。

実演する

うまくいかない部分に対しては、場面をより細かく取り上げ、その部分に対しての演奏に成功する自分をイメージする。

(再度)

実演する

以上のようなイメージトレーニングは、イメージと実行動との繰り返しのトレーニングを、各部分及び全体の仕上がりにおいて何度も行い、よりよい自分の求める演奏に近づこうとするものである。またこのような練習方法は、プロの演奏家のような効果的な技術の鍛錬の方法を熟知していないものにとっては、大変意味のある訓練の方法と考える。これらのイメージ学習は一度に習得出来るものではなく、実技指導を行う際に常にトレーニングとして練習を重ねる必要がある。また指導者と学生の信頼のもとに行える学習方法の一つとも言うことが出来る。

グループB…それぞれの役割に対する自信と責任の意思が徐々にみられるようになった。各自の練習の成果も感じられた。

〈指導のポイント〉

実際に吹いて音を出すと言う楽器の性格上、息継ぎや呼吸の仕方が非常に重要なポイントとなることなどを、実際に演奏していく過程で徐々に指摘した。3グループのなかで唯一複雑なリズムのない単純なメロディーの3重奏の作品であるため、“ずれ”というものが起こらないように互いのメロディーを聴き合ったり、それぞれの練習を聴き合いながら互いの距離を縮めるよう方向付けた。つまりここでのねらいは、同じメロディーをそれぞれ異った楽器でソロ演奏したり、重奏したりして1つの作品を完成する、という一体感を味わわせることである。

グループC…技術・表現ともにレベルアップしており、それぞれの本番への意識も高まりつつあると思っていたが、やはり

1) 井中あけみ「近代ピアノ奏法理論の歴史的考察」—心理奏法理論を中心として—
(修士論文)〈結章…イメージによるピアノ学習〉より参照

第1段階から懸念されていた人間関係でのトラブルが表面化し、事態は解散というところまで来ていた。

〈指導のポイント〉

人間関係のトラブルの解決を優先し、教員の主導ではなく、彼らに解決させるようにすると共に、アフターケアを中心に個別の面談的指導を取ることにした。

〈参考〉今回の事例について

1人の男子学生が他の3人（男子学生1人を含む）とグループ結成の時からなじむことが出来なかった。それぞれ違う楽器であるので、なんとか乗り越えられるのではないかと期待していたが、予想に反し、全員が互いに不信感を抱く所までとなってしまった。結果リーダーが継続不可能を申し出た。

対処法として、このような感情面でのトラブルは多かれ少なかれ必ず起こりえる問題であることを認識したうえで、今回の場合教員同伴で全員の話し合いを即座に持ち、それぞれの意見を述べた。

話し合いは喧嘩同然の発言へとなっていったが、話を十分聞くとという態勢をとった。その後教員は、1人1人の価値を大切に考えていることを述べた上で、改めてアンサンブルの意義や、その必要条件などについて話した。またこの際の学生たちの不満や感情の細かい表現は、その後の精神状態の変化に対応するのに重要な情報となるので、充分注意して観察する必要があった。

2日間の冷却期間を持った後、リーダー中心の学生のみによる話し合いを持った。結果として、1名の男子学生が活動を断念するという形になった。学生

一人一人が、納得しての結果ではないが、本番間近のあせりを持った全員の決断であったと推測される。

ここで、アフターケアが必要となる。まず参加を断念した1男子学生について個別指導を行った。実際には、彼に面会を求めようとする前に、彼自身から報告があり、「自分自身としては最後まで参加したかったが、頑張りきれなくて申し訳ない」という内容のものであった。また、「4階から飛び降りてやろうと思った」とも告白しており、長い間抱えてきたストレスのようすを表現していた。ここではひたすら「聞く」ことに集中し、彼の努力や気持ちに、繰り返しうなずいた。さらに今後社会での活躍にその経験が役立つよう期待して、この場の面会は終了した。

学生たちの話し合いは、大変緊迫した状態で行われた。原因としては1男子学生であるが、それだけには留まらず個々の学生の気持ちが乱れ、やる気をなくさせるという段階に来ていた。

結果その1男子学生だけではなく、全員の学生それぞれのケア的な指導が必要であり、その指導の中では一人一人の価値観を認め、彼らの努力を高く評価していることを具体的に提示し表現した。また今回の問題を1対3の問題とせず、全員の価値観の違いとして問題提起したリーダーの行動は見逃してはならないポイントであり、教員自身大変参考となるものであった。

・第3段階（12月初旬まで）

①〈すべてのグループの仕上がりについて〉
最終調整は順調に行われ各学生とも自覚

が表れ、本番前にふさわしい緊張感が高まっており、技術的な進歩もみられるようになった。このような音楽的レベルの向上は、互いに協調性を大切にすることより育まれたものと言っても過言ではない。いわゆる「音楽」のコミュニケーションが可能になったこととなる。また全体像が確立されていくと同時に「自分」というものの役目もはっきりと認識できるようになった。

② 〈演奏についてのディスカッション〉

3つのグループの演奏について、全員の学生でディスカッションを行った。演奏者側と聴衆者側の両サイドに別れ、それぞれが意見を出し合い、何度もより良い演奏をめざして語り合った。自分たちのグループだけでなく各グループそれぞれが刺激となりより一層大きな一体感が出来上がっていったように感じられた。

〈指導のポイント〉

学生たちの意見交換は非常に価値のあるものとして考え、このような試みに対して間違った意見や方向性があったとしても、すぐ否定する形はとらず、納得のいく比較などを十分に行い討論のなかでより自分たちにふさわしいものを選択させていった。

6. リハーサル・本番を迎えて

以上のような過程を経て本番に挑んだわけであるが、リハーサルでは大勢の聴衆があったこともあり心地よい緊張感を持って最後の調整を行うことができた。音量のバランス、舞台の立つ位置、照明を受けての自分たちの表情など、今までにさほどこだわったことのない世界を経験したことは、演奏を行うことにさらにプラスになって

いったように感じられた。また少人数アンサンブルということからも、それぞれの責任の度合いは大変はっきりしており、「その他大勢」的な行動が全く見られなかったことなども非常に心地よい印象のものであった。

7. 結果と成果

A・B・Cグループそれぞれが、まとまった演奏ができ、個人をもしっかりと表現できている大変好感的な演奏態度であった。勿論、音楽大学の学生に求められるような高い技術や音楽性などと、同じレベルで評価することはできないが、時間をかけてその目標にお互いに協力しながら歩んできた成果は十分に満たされるものであったと考えている。

また途中でアンサンブル出演を断念した学生についても、大変残念ではあったが、コンサートの準備中や本番中、自ら出演者の手伝いを行っていた。その後出演者たちの記念撮影の際には、出演者のリーダーが断念した学生を引き入れて全員で撮影をするという光景がみられた。さらにその写真は（断念した学生を含んだ）額に飾られ教員に送られてきたのである。

結果としては1人が出演しないという失敗の要素も認めなければならないが、失敗の部分からしか学べなかった人間関係の難しさは、思いやりや、人それぞれの価値観を理解しようとする気持ちを、徐々に育んでいたことが感じられた。現場教育においても、今回のようなアンサンブル演奏経験を生かし、よりよい幼児教育が円滑に行えることを望む次第である。

このアンサンブル活動は、ピアノ演習と

いったタイプのものとは違い、人の活動や様子を見ながら 自分自身の学習を行うというものである。その意味から考えると、同調や比較、意見の交換など人とのコミュニケーションにポイントを置いて活動を行ったことは、音楽的表現や演奏技術の向上に確実に効果をもたらしたと考えている。

(学生感想文より)

— 技術編 —

- ・ 鍵盤楽器とそうではない楽器の音量のバランス調節が難しかった。
- ・ 楽器によって呼吸や息継ぎの仕方が違うので、合わせることに時間がかかった。
- ・ 全員の呼吸が同じでないと演奏に納得がいかなかった。

— 精神面編 —

- ・ 一人一人の個性を生かしながら演奏するのはお互いを認め合うことからだと思った。
- ・ 自分が責任をもって練習を行うことは最小限のマナーであるという意味が理解できた。
- ・ 個人のピアノ練習では自信がないけれど、アンサンブルは練習の意欲が湧いた。
- ・ 人前で演奏することは、とても抵抗があったけれど、みんなと作り上げてきたことで頑張ることができた。
- ・ みんなのすごい真剣さに“鳥肌”がたった。
- ・ 何事にも自信のない自分が確かめたくてアンサンブルに挑戦した。結果自分の力が出し切れた気がする。

等

このように、ここで行ったアンサンブル演

習・実践は幼児教育者を指す者にとって、現場で応用できる貴重な経験の1つであると考えられる。“お遊戯会”“鼓笛隊”等多々の催しごとで、音楽を含んだ幼児たちへの指導は、大変重要なまたやりがいのある仕事である。そしてそれは幼児1人1人に目を向けることや、全体のバランスを配慮することなど総合的な指導力を必要とする。その意味においてもこのアンサンブル演奏活動で得た経験は現場で応用できる価値のあるものと言えよう。

8. まとめ

今回のアンサンブル演奏に参加した学生は、吹奏楽部などの合奏の経験者は2名のみであった。

初めの段階ではこの数字から考えると、不安が予想されるのも仕方ないことであろう。しかしアンサンブルは、個人的に実技レベルを向上させることのみで行えるものではない。むしろ人との協調性やコミュニケーションを大切に保っていくことの中から自分自身の個性が自覚でき、実技的にも向上が見られるものであるといえよう。今回は、経験者も未経験者も創作、演奏、コンビネーションなどの部分で、それぞれが互いに助け合い、高め合い、それぞれの学生がレベルのアップにつながるよう努力できたと感じられた。日頃のピアノ実技レベルなどから学生自身の音楽能力を決め付けるのではなく、アンサンブルの場だから発揮できる学生がいることを改めて把握しなければならない。つまり我々指導者は音楽専門家を育てていくのではなく、幼児教育者を育てなければいけないことをもう一度再認識する必要がなかろうかと教員

自身考えた。また人間関係においてのトラブルは当然予想されていたものの、想像以上にその細やかな配慮と注意力を持ってその指導を行わなければならないことは今後見逃してはならない重要なポイントの1つと言えよう。また教員自身研究を続けていかなければならない、課題の1つとなった。そのことから今回のアンサンブル演奏活動は発見と再確認があったイベントであり、今後のこのような形の指導方法が学生たちにどのような影響を及ぼすのか、興味深く調査を続けていきたい。

9. 15年度に向けての指導

15年度のアンサンブル活動はすでに始まっている。人数が14年度の2倍で20人という数となった。人数が多いことは、各学生の要求にいかに対応していくかが問題点となるはずである。そこでこの20人に対してはアンケートを行っており、今後の個人面接などを含めて、どのような指導が適切であるか検討しながら、活動をスタートしている。